

## 1. 聖書における肉と霊

旧新約聖書を通じて、肉(バーサール)は霊(ルーアハ)と対をなす概念です。「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創2:7)という叙述は、私たちが旧約聖書の人間理解を知る手がかりになります。人間はただあの神の息によってのみ生命を持つに過ぎない。しかもこの息は決して、彼の肉体に内在するものではないのです。

この肉(バーサール)は、人間を含めた動物一般の肉をも意味し(創6:13, 9:4)、同時に人間そのものをも意味します(イザ50:5 = ルカ3:6)。このようにヘブライ的理解においては、人間とは「生きる者となった肉体」であって、ギリシア思想のように魂が肉体に宿ったもの、従って肉体は死んでもその霊魂は不滅であるという概念は、そこには存在しません。「息吹(ルーアハ)を取り上げられれば彼らは息絶え、元の塵に戻る」のです(詩104:29)。

原始キリスト教がヘレニズム世界において展開発展したため、新約聖書の諸文書がギリシア思想の影響をある程度受けた人々に配慮して、その用語や教え方を選んでいることは確かです。しかしそこで語られている福音の弁明、言い換えれば初代キリスト教の思想の全部が、ヘブライ的な救済史理解と人間理解に基礎を置いているという重大な事実が神学界が注目し、これを再発見したのはごく最近、ほんの20世紀に入ってからのことでありました。このため現在でも、新約聖書の思想とギリシア思想との間にある根本的な区別を殆どあるいは全く理解していない論者が、教会の内外を問わず多いのです。

しかし新約聖書の諸文書が書かれた後、その解釈の上に築かれるキリスト教思想の本格的なギリシア化が起こったのは、かなり早い時期からでありました。それは、キリスト教がヘレニズム世界で徐々に組織としてのカトリック教会に至る過程で行われました。ヘブライ的人間理解に代わって、人間を精神/霊(プニューマ)と霊魂/命(プシュケ)と肉体(ソーマ)から成るという理解で、聖書を読むようになったのです。

そこでは「肉(体)」の概念が否定的になり、それが罪の概念と結びついて、倫理的二元論によって新約聖書が読まれることとなります。特に「肉の業」、「肉の欲」、「肉の思い」などという用語が、ヘブライ的ではなくて、ギリシア的な「肉体の業、欲、思い」という非常に狭い意味で理解され、殆ど「性行為」に集中的に偏って適用されるようになりました。近年に至るまで、あるいはなお現在でも、如何にこのような罪理解がキリスト教世界を強力に支配して来たかは、驚嘆に値することです。

ヘブライ的人間理解における肉と霊の関係というのは、被造者と創造者の関係であって、肉という言葉で人間そのものの被造者としての限界を語りつつ、それは創造者の霊によって生かされている人間存在のすべて、精神活動と肉体的存在そのものを指しています。そしてそれ自体が罪なのではなくて、罪と死に支配されることによって「神の栄光を受けられなくなっている」(ロマ3:23)、「神の怒りを受けるべき者でした」(エフェ2:3)と、使徒たちは説明したのです。パウロはこのようなヘブライ的人間理解によって、福音の弁明を展開しました。ですから「霊に従って歩む」(ロマ8:5)とは神に従う、つまり神が御子イエス・キリストによって成し遂げてくださった贖いを信じる信仰によって歩むことであり、「肉に従って歩む」とは「肉体の欲望に従って歩む」という意味ではなくて、キリストの福音を信じないこと、罪と死の支配に服従し続けることを意味します。

この場合、「神に創造された被造者」という概念は、その原初において神に創造されたという歴史上の起源を意味するよりも、むしろ現在の信仰の事柄として理解しなければなりません。それは、人間の現在が根本において神に依存している、神が我々の存在の根拠である、という信仰告白なのです。人間は自らが支配者であるのではなく、支配者なる神に服従すべき存在であるということです。

ガラテヤ書には「肉の業」と「霊の結ぶ実」の具体例があげられていて(ガラ5:19-23)、あたかもキリスト教的禁忌(タブー)と功績の一覧表のような観を呈しています。このような一覧表の例は、旧約聖書では数え切れないほど多方面に亘って存在しますし、新約聖書でもこの他に多く見られます(マコ7:21、ロマ1:29-31、1コリ6:9-10)。これらの表は実は、それが述べられたそれぞれの時代の修辞的常套句を反映したものであって、その当時の援用の目的(Sitz im Leben)とは関係なく、それだけを切り離して永遠的な意味を持つわけではありません。

ところが、それらを援用した背景や目的である「霊に従って」や「肉に従って」ということの福音的理解については無知であるが、使われている修辞的常套句には機械的(律法的)に縛られる原理主義的な人々が、実際にはキリスト教界の内外には多いのです。「肉に従って」という言葉が非常に限定的な意味に理解されてしまって、まるで「禁欲」=「霊的生活」であるかのような錯覚が、キリスト教の長い歴史を支配して来ました。そして正しい意味での「信仰」も「キリストの福音」も殆ど全く理解することのない、ただの「善意の人」(栄光の賛歌)が、地に溢れることになりました。

## 2. イエスの死

新約聖書、特に福音書において、イエスの死がどのように描写されているかを見てみましょう。なぜならそれが、原始教会がどのように死の恐ろしさを理解し、それゆえに復活を信じる信仰の大きな喜びによって支配されるに至ったかを、彼らの福音宣教という形で証言してくれているからです。

イエスはゲッセマネで、自分が死に直面していることを知っていました。「イエスは深く恐れ、悶え始め」、「わたしの魂は悲しみのあまり、死ぬほどである」と弟子たちに言われました(マコ 14:33-34/フランシスコ会訳)。しかしそれは、イエスを殺そうとする者への恐怖でも、死に至る苦痛への恐れでもありませんでした。そうではなくて、イエスは死そのものを恐れておられたのです。

イエスは来るべき死が、ご自分に与えられた任務であることを、既に知っていました。「わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。」(ルカ 12:50) 死は神の敵であるから(1コリ 15:26)、死ぬことそれ自体が神から全く捨てられることであることを、知っておられたのです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」(マコ 15:34) ヘブライ人への手紙はイエスの死の恐怖を、「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声を上げ、涙を流しながら、……」(5:7)と描写しています。イエスは死に直面して、そのように泣き叫ばれたのです。イエスは今や、現実、神の最後の敵の手の中におられました。

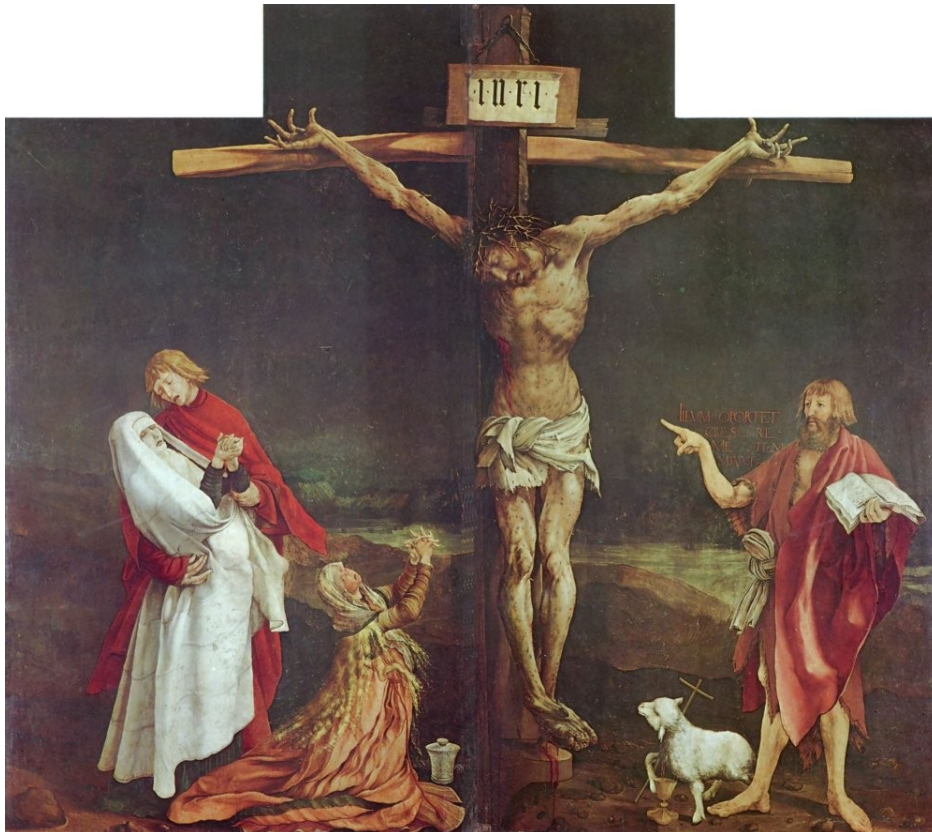
この事実について、原始教会がもっともらしい説明を一切しなかったことに、私たちは驚くと同時に、感謝しなければなりません。このことにつまずいた人々が、すでに早い時期からいたことを私たちは知っています。グノーシス主義者と呼ばれているのがそれです。

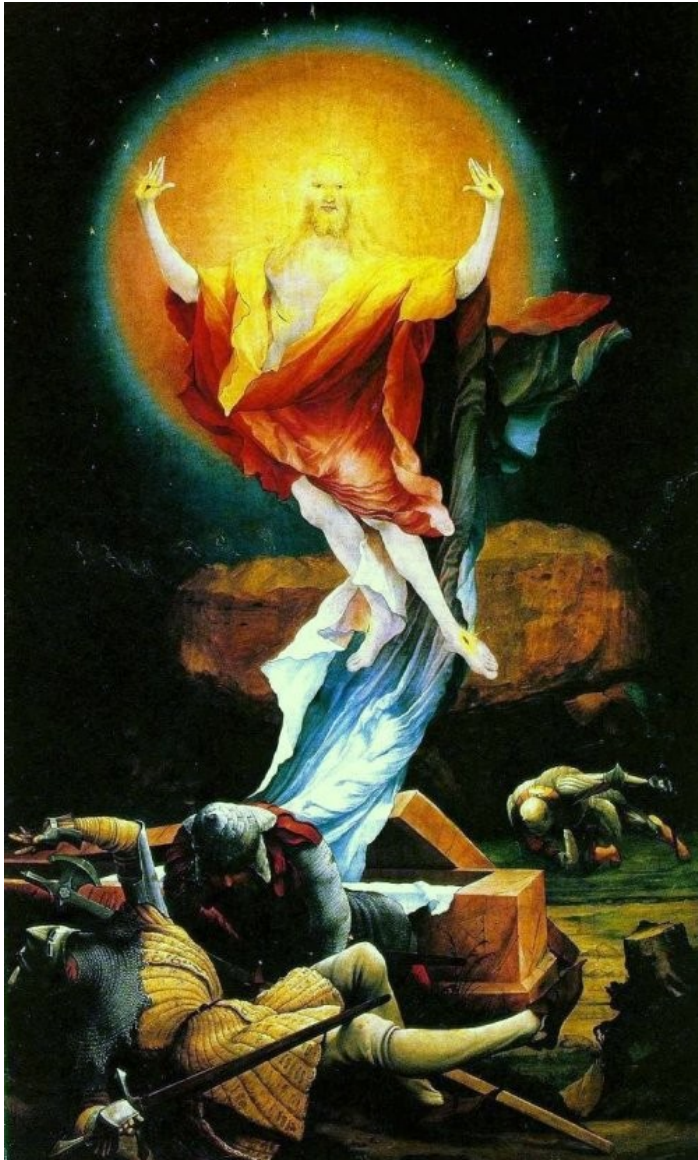
新約聖書におけるイエスの死の描写は、ギリシア的な靈魂の不滅という概念との根本的な差異を、非常によく示しています。イエスはその体においてだけではなく、心においても、極限までの恐怖の中で死を経験されました。イエスは実際に死ぬこと、神に捨てられること、生命が破壊される領域に踏み込んで行くことによって、死を征服されたのです(マコ 3:27)。原始教会はその描写において、イエスの死の徹底的なすさまじさを和らげようとはしませんでした。

キリスト教の復活信仰を理解しようと思うなら、キリストの復活によって征服されたものが、死であって、単なる人間の物質的なもの、肉体的なもの、弱さや罪深さではないことを、知らなければなりません。

O.クルマンは、次のように述べています。

死そのものは、イエスの死でさえも美しくはない。復活前の死は、実に腐臭に取り囲まれた死の頂点である。そしてイエスの死は、偉大な画家グリューネヴァルが中世に描いた祭壇画のように、忌まわしいものなのだ。しかし、まさにこの理由の故に、この画家はそれと並んで、無比の手法で、大勝利であるキリストの復活を、新しい復活の体のキリストを描く術を理解したのである。美しい死を描く者はだれも、復活を描くことは出来ない。





マティアス・グリューネヴァルト  
(Matthias Grünewald, 1470/1475 年頃 - 1528  
年 8 月 31 日)

16 世紀に活動したドイツの画家。  
ドイツ絵画史上最も重要な作品の 1 つ  
である『イーゼンハイム祭壇画』の作  
者である。





### 3. 罪と死

自分はキリスト信者であると思っている現代の普通の人たちの大部分が、新約聖書の中心主題である死者の復活ということを信じているか否かは別として、人間というものは死んでもその靈魂だけは生きていて、永遠に不滅であると思っています。それは従来、教会での牧師や司祭の説教によって教えられて来たことであります。私もすでに洗礼を受けてから60年を越える老人であります。寡聞にして靈魂の不滅を否定するような説教をこれまでに聞いたことがありません。

新約聖書学および古代教会史学者であるO.クルマンが、1946年の「キリストと時」に続いて、1956年に「靈魂の不滅か死者の復活か?」という小論を出版したとき、それはかつてない熱狂と同時に激しい反発をもって迎えられました。“この広く受け入れられて来た理解は、しかし、キリスト教についての最大の誤解の一つである”と、彼が結論づけたからです。

死者の復活という概念はキリストの出来事につながっていて、それ故に、ギリシャ的な靈魂不滅の信仰とは相容れない。それは救済史に基づいているので、現代思想とは馴染まない。しかし、それは初代キリスト教の宣教の欠くことの出来ない要素であって、これを放棄したり再解釈することは、新約聖書からその本質を奪うことになる。

先の講義で私は、「(旧約聖書の)原初史はイスラエルの一つの神学的原因物語りの最も本質的要素として理解されるべきである」というフォン・ラートの主張を紹介しました。<sup>※1</sup> そこでは、死は人間の罪によって世に入って来た呪い<sup>※2</sup>であり、その結果すべての被造物がこの呪いに巻き込まれました。<sup>※3</sup> このように、死とは何か正常ではないもの、神に敵対するものであるというのが、ヘブライ的認識であり、それは聖書において展開されている救済史というものを理解する出発点であります。

復活への信仰は、このような死と罪の結びつきに関するヘブライ的認識を前提にしています。「罪が支払う報酬は死です。」(ロマ6:23) 罪が原因でありますから、これが取り除かれるときのみ、死は克服されるのです。これが初代教会全体の、一致した理解でありました。

新約聖書は人間を説明するのに、精神/霊(プニューマ)、魂/命(プシケ)、肉(サルクス)、体(ソーマ)など、ギリシア哲学と同じ用語を使っています。ところがそれらが意味するものは全く異なっているので、これらの用語を純粋にギリシア的に解釈してしまうと、新約聖書全体を間違っ理解することになります。

新約聖書が魂と体について、あるいは内なる人と外なる人について語るとき、それは一方が善であって他方が悪であるというふうに、両者を対立させているではありません。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。」(マコ8:36) 「命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。」(マタ6:25) 「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」(マタ10:28) 体と魂は一つであって、両者とも神に創造されたものなのです。魂のない体も、体のない魂も、独立した存在としては意味を持ち得ません。

新約聖書の諸文書が徐々に成立して行く過程で、同じ精神/霊(プニューマ)や肉(サルクス)という用語であっても、その使い方が決して厳密に一樣ではなかったことは当然です(ギリシア語の辞書や文法書が先にあって、それを使って新約聖書が書かれたかのような勘違いをしてはならないのです)。そのことを承知の上で、パウロの神学における特徴的な用語法に注目すると、肉と霊とは外から人間の中に入って来る二つの超越的な力です。<sup>※4</sup> 肉とは罪(それゆえに死)の力であって、外なる人も内なる人も捕らえます。霊はそれと反対に(新しい)創造の力であって、同様に外なる人も内なる人も捕らえます。それは救済史的理解における肉と霊であって、死の力である肉がアダムの罪によって人の中に入って来ました。それに対して、命の力である霊、創造(復活)の力である霊が、聖霊を通して私たちに与えられました。今やこの命の力である霊が、新しい共同体である教会の一同の中に働いているのです(使2:38-42)。

※1 聖書講義 2016-4 5、二つの神学の立場

※2 創3:17

※3 創3~11章、ロマ8:20-22 参照

※4 ロマ8:1-17、ガラ5:16-26 参照

## 4. からだの復活

「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください。」(ロマ 8:11) ということは、「体(だけ)を殺す者」(マタ 10:28) を恐れる必要はなく、そして「むしろ、魂も体も … 滅ぼす …」(同) と言われているように、魂も不滅ではありませんから、この両者が共に復活させられるのです。「アダムによってすべての人が死ぬことになった」(I コリ 15:22) その「朽ちるもの」(I コリ 15:42) が、「キリストによって … 生かされることになる」(I コリ 15:22) のです。

現在すでに、聖霊によって「内なる人」は「日々新たにされていきます。」(II コリ 4:16) しかし、肉(罪の力)は未だ「死に定められたこの体」(ロマ 7:24) を捕らえているので、人は「肉に従って歩む」か「霊に従って歩む」かを、選ぶ決断をしなければなりません。「死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられる」(I コリ 15:52) 「からだの復活」は、最後の日までは起こらないからです。それは「万物が新しくなる日」(黙 21:5) であり、「もはや死もなく、もはや悲しみも嘆きも苦勞もない日」(黙 21:4) です。

「からだの復活」は、肉(サルクス)の復活ではありません。「自然の命の体で蒔かれて、霊の体が復活するのです。」(I コリ 15:44) しかもそれは、全被造物(ロマ 8:19-22)の再創造の一部であつて、「わたしたちは、… 新しい天と新しい地とを … 待ち望んでいるのです。」(II ペト 3:13) キリスト者の希望は、人間一人一人にだけではなくて、全被造物の滅びからの解放に関わっているのです(ロマ 8:19-25)。

このように、「からだの復活」はすべてを包括する再創造の一部でありますから、人間個人の死後に開始するものではなく、終わりの日の出来事です。人間一人一人の死は、不滅の霊魂が体から解放される、つまりこの世からあの世への移動のようなものではありません。そして終わりの日の「からだの復活」は、救済史の目標であり完成であります。

このように、神の被造世界を「罪が死によって支配していた」(ロマ 5:21) のですから、それは「最後の敵として、滅ぼされ」(I コリ 15:26) なければなりませんでした。

「肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」(ロマ 8:3) キリストは「多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後」(ヘブ 9:28)、「死者の中から復活し、眠りについて人たちの初穂となりました。」(I コリ 15:20)

神は創造の最初の日のように、今や再び命を与える(終わりの日の)創造を実現されました。その初穂として、キリストは死者の中から復活させられたのです。私たちの内に宿っている聖霊によって、キリストは私たちをも、「御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(フィリ 3:21)

「キリストは死者の中から復活された」(I コリ 15:12,20)、「本当に主は復活された」(ルカ 24:34) とは、キリスト教信仰のいわば出発点であります。この「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエス」(ロマ 8:34) の知らせ(福音)の上に、教会が、そしてその信仰と神学が土台を置いています。

原始教会がキリストを「死者の中から最初に生まれた方」(コロ 1:18) と宣教したとき、それは彼が復活の初穂、霊の体の初めとなられたという意味でした。ですから、死はすでに滅ぼされ、新しい創造が起こり、復活の時代が明け初めたというこの決定的な確信を、もし私たちが新約聖書のすべての記述の背後に読み取ることに失敗するなら、それは封印された書物になってしまいます。

「キリストは死者の中から復活し、眠りについて人たちの初穂となりました。」(I コリ 15:20) しかし私たちは未だ「神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。」(ロマ 8:23) この現在と将来、「すでに実現した」と「未だ待ち望んでいる」という緊張関係が、新約聖書にとっては本質的な要素であり、それはすでにイエスの神の国宣教にも現れていました。「神の国は近づいた」(マコ 1:15) と宣教し始められたイエスが、他方では「神の国はあなたたちのところに来ているのだ」(マタ 12:28) と宣言されました。なぜなら、イエスと共に働く聖霊が、癒しと奇跡によって、すでに死の力を撃退しているからです。死者を生き返らせたいいくつかの福音書の奇跡の記事も、恐らくイエスが御自身の死によって勝ち取られた死への勝利の先取りとして、理解すべきでありましょう(マタ 11:5、マコ 5章、ルカ 7章、ヨハ 11章など)。

ですから、私たちはすでに実現したイエスの復活と、未だ待ち望んでいる私たち自身の復活が実現する終わりの日との間の、中間の時に生きているのです。それは、私たちをも復活させてくださる聖霊が教会共同体の内に宿り、働いている時代です。それゆえにパウロは、「初穂として霊をいただいている」(ロマ 8:23)、そして「初穂であるキリスト」(I コリ 15:23) と、聖霊とキリストに同じ「初穂(アパルケー)」という言葉を当てはめました(フランシスコ会訳)。

原始教会において人々は、聖霊によって与えられる終わりの日の先取りを、ミサの中で「パンを裂く」ことにおいて、もっとも明瞭に体験しました。「わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。」(I コリ 10:16) この交わりの儀(聖餐)において、私たちは復活されたキリストと最も親しく交わることを、現代のカトリック教会のミサ典礼書は表現しようとしています(典礼憲章 47 参照)。